

1. 「アド・バルーン」の語り

織田作之助の「アド・バルーン」(『新文学』1946年3月)は長藤十吉の語りで構成される物語である。十吉の語りについては、「アド・バルーン」論の要点としてすでにくつかの論稿で言及されている。たとえば、樋口彩乃は、織田作之助の「大阪惜愛」というモチーフを背景としつつ、十吉という語り手が大阪の「灯」との密接な関わりによって大阪の町を描出していることを論じている¹。また、斎藤理生は、十吉の語る行為を前景化することによって十吉と落語家である父親・円団治を受け入れる物語として「アド・バルーン」をとらえ、さらに物語の「眼目」から「脱線」する語り「大阪式の話術」を見てもいる²。こうした論稿からもわかるように、「アド・バルーン」は語る行為や語り手の前景化という視座の導入が必要不可欠な小説であるといえよう。

ただし、多くの論者の語り手に対する関心は物語前半部に集中しているように思われる。「アド・バルーン」では、十吉の誕生(1903年)から1941(昭和16)年8月10日、高野山に父の遺骨を納めに行くまでの38年間は物語時間として設定されている。しかし、その年月が時間順に語られているわけでない。まず、十吉は「その時、私には六十三銭しか持ち合せがなかったのです。」と語り出す。「その時」とは、白浜で再会した初恋の相手・文子に会うために東京まで歩いていこうと決心した時点であり、十吉が二十八歳時点、1931年のことだと推測できる³。十吉は「その時」と語り始めた後、時間を遡り、誕生から東京行きを決心するまでを語り、再び「その時、私には六十三銭しか持ち合せがなかったのです」と語る。ここまでを物語の前半とすると、それ以降、東京での文子との再会から帰阪後の自殺未遂、そして恩人・秋山との「天王寺西門の出会い」を経て、最後の父の納骨までを後半と区切ることができる。この前半、後半をモチーフ別に考えると、前半は「大阪惜愛」を、後半は「人生紙芝居」をめぐる「美談」を中心に構成されているとあってよいだろう。しかし、両者の関係はアンバランスだ。十吉は幼時の記憶を語りつつ、次のような語りを差し挟む。

私のような平凡な男がどんな風に育ったかなどという話は、思えばどうでもいいことで、してみると、もうこれ以上話をしていても始まらぬわけだと、今までの長話も後悔されて来ます。しかし、お喋りな生れつきの身から出た錆、私としては早く天王寺西門の出会いにまで漕ぎつけて話を終ってしまいたいのですが、子供の頃の話から始めた以上乗り掛った船で、面白くもない話を当分続けねばなりませんまい。

自分が生まれ育った大阪の町に対する愛着を細やかに語る部分を「今までの長話」といい、「面白くもない話」といいつつも、それでも「やはりなつかしくて、つい細々と語りたくて」と十吉は語りを続行していく。十吉のことばをそのまま受け入れるならば、

物語は最終目的である「天王寺西門の出会い」に向かって語られていたはずだが、十吉の「惜愛の気持」によって語りが大きく蛇行させられ、その結果、物語言説が肥大化することになる。こうした物語言説の肥大化が、十吉のことばとほうらはらに、前半の中核をなす「大阪惜愛」というモチーフを前景化するのである。また、大きく蛇行していく語りを「脱線」や「大阪式の話術」として見ることも可能だろう。

以上のように考えたとき、物語後半部の重要性は相対的に低下せざるをえない。十吉は後半部を語り始めるとき、「考えてみると、話の枕に身を入れすぎて、もうこの先の肝腎の部分詳しく語りたいた熱がなくなっていました。」と説明する。前半部を「話の枕」とし、後半を「肝腎の部分」としながらも、語ることに對する情熱の喪失を十吉は語ってみせる。物語の終極として設定されている「天王寺西門の出会い」という「美談」についても、「この話がもしかりに美談であるとすれば、これからが美談らしくなる訳ですが、美談というものはおよそ面白くないのが相場のようなものですから、これから先はますますご辛抱願わねばなりませんまい。」と説明し、「美談」を語ることに消極的であることを明らかにする。

もちろん、こうした語りそのものが「脱線」の方法の射程にあることも考えられなくはない。十吉の消極的な態度はある種のポーズであり、逆説的に「美談」をテーマ化するように作用しているという解釈が成立するのではないか。十吉は前半を「面白くもない話」としつつも大阪への「惜愛」を語ってみせた。その十吉が「美談というものはおよそ面白くない」というのならば、物語後半にもなんらかの意味づけを行うことが可能であるはずだ。にもかかわらず、十吉と秋山の再会と父との和解を中心とする物語後半は前半に比べると重要視されることは少ない。父との和解が「アド・バルーン」の物語を統括する意味を持っているとしても、そもそも、父との再会に行きつくまでに「美談」が導入されるのはなぜなのか。いかにも唐突に導入される「美談」は「アド・バルーン」という物語のなかでどのような役割を持っているのか。

本稿では、以上のような問題意識から出発し、アンバランスな十吉の語りをしてがかりに、まず、後半部の「天王寺西門の出会い」について考察し、その考察をもとに「アド・バルーン」を再考することを目的としたい。

2. 「美談」のモデル

「その時、私には六十三銭しか持ち合せがなかったのです」という語りが再度繰り返されるところから「アド・バルーン」の物語は後半に入る。十吉は幼馴染の文子に会うために十八日かけて線路伝いに東京まで歩いていく。しかし、自分に会うために東京まで歩いてきたという十吉を文子は気味悪く思い、大阪までの旅費を恵んで十吉を追い返す。十吉はその対応に絶望し、自殺を決意して大阪に帰ってくる。大阪に帰ってきた十吉が中之島公園で佇んでいるとき、拾い屋の男・秋山に声をかけられる。秋山の導きに

よって拾い屋の職を得た十吉は車の先引きを経て紙芝居屋になる。その後、十吉は行方知れずとなっていた秋山と四年ぶりに再会を果たし、さらにその五年後、再度再会する。そこに十吉の父親・円団治が現れ、十吉は父と和解し、ともに暮らすことにする。そして、十吉は秋山との五年後の秋山との再会の約束を思いながら日々を送る。

「アド・バルーン」後半は十吉の更生と秋山との再会という「美談」を中心に語られていく。この「美談」について青山光二は、「結末近くなってからの人生紙芝居の挿話は、禁酒運動や貯金奨励など、ここへきて戦時色濃厚と云えないこともないが、さらに云えば、織田作之助の時局便乗とは、せいぜいこの程度のものだったのである。」と解説している⁴。織田作之助の「あとがき」によれば、「アド・バルーン」は「昭和二十年三月、大阪が焼けた直後、大阪惜愛の意味で、空襲警報下に、こつこつと書いた作⁵」であり、青山の解説はこの点を踏まえている。それに対して、斎藤理生は後半の「美談」を単なる「時局便乗」ではなく、新聞メディアの「嘘」や「脚色」を可視化するものとしてとらえ、「メディアによる〈大きな物語〉に回収されることに抗う姿勢」を指摘したうえで、「戦中に書かれ戦後に発表されたこの小説の同時代的な批評性を認めることも可能ではないだろうか」と結論する⁶。十吉の「美談」への消極的な態度はそうした批評性の顕現なのである。さらに、そうした批評性が前半と後半のアンバランスさにも関係していると佐藤秀明は指摘している。「美談」を相対的に小さくしようとして、前半のボリュームを増やし、そうすることで「大阪惜愛」のモチーフも生かすことになった」と佐藤は指摘する⁷。そのうえで、秋山との出会いと再会の挿話が必要なのは十吉の転々とする運命を描き出すためだと佐藤は述べている。十吉は誕生直後から里子に出され、大阪の各地を転々とする。一旦は実家に戻るが、丁稚奉公に出て以降は奉公先を転々とし、さらには夜店の扇子売りから白浜温泉の客引きになっている。秋山と出会った後も、拾い屋、車の先引き、紙芝居屋、造船所の倉庫番、病院の雑役婦、貯蓄会社の外交員と職を転々とする。「アド・バルーン」全体を貫く一つの軸として、十吉の放浪が据えられているのは確かである。

秋山との出会い以降の十吉の放浪には一つの明確なモデルがある。物語のなかで秋山との再会を報じた『大阪朝日新聞』は現実においても「美談」を報じていた。主に「人生双六」と名づけられた一連の記事はまず、1936（昭和11）年3月20日付『大阪朝日新聞』掲載の「路傍で拾った新生／～風のやうに去ったその恩人～／ルンペン君を捜す紙芝居屋」という記事が嚆矢となっている。この続報として同月24日に「どん底に奮発！／奇遇に誓ふ更生／位置転倒のルンペンと紙芝居屋／更に五年後を約す人生双六」という記事が掲載される。そして、その五年後、1941（昭和16）年3月になると、1日に「人生双六／五年の“上り”／さて相手は？迫る誓ひの日」、16日に「大阪城の出世双六／大詰へ飛入り少女／『お蔭で私は踊の名取に』」、22日に「出世双六／天王寺の再会／再び「五年後」へ飛入り十一人」という記事が掲載されている。これらで紹介される一連の出来事と人物たちが「アド・バルーン」後半のモデルになっているのである。

まず、これらの記事の最初、「路傍で拾った新生」（1936/3/20 5面）を引用する。

路傍で拾った新生 ～風のやうに去つたその恩人～ ルンペン君を捜す紙芝居屋
 肉親から郷党から求職口から……すっかり社会から見すてられた生ける屍の前
 科者がふと行きずりの一ルンペンに助けられて身も心も再びあかるい太陽の
 もとに更生、水のやうに別れ去つたこの『恩人ルンペン』への強い思慕から五年間
 もその行方を探し求めてゐるといふ、これは街に捨てられたゆかしい人生劇—
 十九日朝大阪府刑事課に『恩人を探して下さい』と出頭した東成区深江町小山鉄工
 所内伊藤清君（三十三年）には数奇を極めた半生の物語が秘められてゐた

前科四犯を重ねて昭和六年十月東京巢鴨刑務所を出た彼は前科者の烙印からあ
 らゆる職場を閉め出され郷里や肉親にもつきはなされて僅か六十三銭を懐中
 にあてもなく東海道をとぼとぼとやつと十八日目に大阪にたどりついたのは同七
 年の師走もおし迫つた二十七日のたそがれ

大阪城の濠のほとりでまたしても行き暮れた絶望の境涯をなげいてゐるときふと
 通りすがつた一ルンペンの拾ひ屋から三十四銭を恵まれ『働かう、くよくよするな』
 と呼びかけられ、飢ゑてゐた人の情と簡明な忠告に動かされ、そのルンペンに伴は
 れて拾ひ屋をするうち、ある人の世話で八百屋の先引となり死んだ積りで一生懸命
 働いた金が十円ばかりたまつたので古
 自転車を買ひ紙芝居屋となつて街街を
 流し今では数百円の貯へも出来たので
 昼は子供の紙芝居、夜は辻々に立つて
 禁酒宣伝をつゞけてゐるが

かうして何不自由なく更生出来たの
 も思へば大阪城でのあの一ルンペン
 の情からである、それからもう五年、
 秋月と名乗つてゐたその男を探しあ
 ぐんでゐるといふのである

伊藤君は語る 秋月さんに何とかして
 御礼をしたいと昨年九月十日あの人に
 救はれた日を更生記念日として毎月一
 円づつ秋月さんの名義で貯金してこん
 どめぐり逢つたときにお渡ししようと
 神かけて再会の日をまつてゐます

路傍で拾つた新生
 風のやうに去つたその恩人
 ルンペン君を捜す紙芝居屋

十九日朝大阪府刑事課に『恩人を探して下さい』と出頭した東成区深江町小山鉄工所内伊藤清君（三十三年）には数奇を極めた半生の物語が秘められてゐた

前科四犯を重ねて昭和六年十月東京巢鴨刑務所を出た彼は前科者の烙印からあらゆる職場を閉め出され郷里や肉親にもつきはなされて僅か六十三銭を懐中にあてもなく東海道をとぼとぼとやつと十八日目に大阪にたどりついたのは同七年の師走もおし迫つた二十七日のたそがれ

大阪城の濠のほとりでまたしても行き暮れた絶望の境涯をなげいてゐるときふと通りすがつた一ルンペンの拾ひ屋から三十四銭を恵まれ『働かう、くよくよするな』と呼びかけられ、飢ゑてゐた人の情と簡明な忠告に動かされ、そのルンペンに伴はれて拾ひ屋をするうち、ある人の世話で八百屋の先引となり死んだ積りで一生懸命働いた金が十円ばかりたまつたので古自転車を買ひ紙芝居屋となつて街街を流し今では数百円の貯へも出来たので昼は子供の紙芝居、夜は辻々に立つて禁酒宣伝をつゞけてゐるが

かうして何不自由なく更生出来たのも思へば大阪城でのあの一ルンペンの情からである、それからもう五年、秋月と名乗つてゐたその男を探しあぐんでゐるといふのである

伊藤君は語る 秋月さんに何とかして御礼をしたいと昨年九月十日あの人に救はれた日を更生記念日として毎月一元づつ秋月さんの名義で貯金してこんどめぐり逢つたときにお渡ししようと神かけて再会の日をまつてゐます

スラム街を消す
 大通りと三階建アパー
 知事の不良

この記事では伊藤清という前科者の男性が自分を救ってくれた秋月という男性を探し求めていることが記されている。この記事には錯誤も多く、続報記事から秋月は実際には秋津という名前であったことが確認できる。また、この記事では伊藤と秋津の出会いが昭和6年の師走の27日と読み取れなくもないが、続報記事によると二人の出会い

は昭和7年9月10日となっている⁸。そうした細かな錯誤はあるものの、一読すれば、「アド・バルーン」がこの新聞記事に取材していることが容易に理解できよう。自殺を考えている場所が大阪城の濠であるものが「アド・バルーン」では中之島公園へ変更されているなど、もちろん変更箇所はある。また、個人の名前や過去の経歴については異なっているが、来阪以降の経緯に関していうと記事への依存度はかなり強い。拾い屋から八百屋の先引き、その後、紙芝居屋になり、禁酒宣伝を始めた、という伊藤清という人物の履歴はそのまま、十吉の後半の職業遍歴になっているし、秋津が伊藤を助ける行動はそのまま秋山に置き換えられている。年齢に関しても、記事中の伊藤清が33歳とあり、十吉の年齢とほぼ一致する。さらには、語り始めにある「六十三銭」もこの記事での伊藤の所持金と一致している。また、往路と復路の違いこそあれ、東京・大阪間の徒歩での日程が「十八日」という点も記事を参考にしていることがわかる。

3月24日の伊藤と秋津の再会についての記事も抜粋しておこう。(1936/3/24 15面)

一日も恩人の姿が忘れられない、一目会つてお礼をと五年前に別れた恩人の姿を熱心に捜しもとめてゐる同君（引用者中：伊藤清）の気持が済生会大阪府支部主事田村克巳氏らの知るところとなつて、その記事が三月二十日付の本紙に一部既報された、新聞にのつた伊藤君の写真を見て驚いたのは同じ大阪の東成区北生野町二丁目一二民部矢八方の二階で失業と病苦のため世を憐んでゐた秋津君だつた

直ちに伊藤君の奇遇先東成区深江町五一七小山鉄工所へとんで行つたが行商に出た同君は不在で会はず、帰宅して恩人の健在を知つた伊藤君は大喜びで、田村主事とも相談する一方、さる昭和九年一月から恩人への感謝のため貯めてゐた郵便貯金計十五円を秋津君名義に変更したり、謝恩の記念品を買入れたり、いそいそと用意をととのへ、二十三日午後八時秋津君をたづねた

五年ぶりに相擁した二人は朗らかに笑ふ目にも涙があつた、昔自分が救つてやつたルンペンがいまは立派な洋服をきて、しかも自分のために血のにじむやうな貯金をしてゐてくれた、しかし自分は元も木阿弥で月十五円の間借費にも窮してゐたと考へたとき、善良な秋津君の胸に奮然たる勇猛心が湧いてきた、伊藤君も同じこと自分はネクタイこそ締めてゐるがまだまだルンペンにすぎない、ほんとうの更生はこれからだ！と心に決したこの二人の気持が期せずして次のやうな誓約書となつて現はれた

『こゝで再び交際をはじめてはお互ひに依頼心を起してはいけないから、今後は平常の交際をさし控へ五年後（昭和十六年三月二十一日午後五時五十三分）天王寺西門大鳥居の下で顔を合はせよう、それまでお互ひに毎月一円づつを相手のために貯金し合はう』

二十一日の午後五時五十三分は彼岸の中日の日没時で太陽が大鳥居の真西に沈む瞬間である、心の彼岸に達するまでお互ひに自策自励して独自の運命を開拓し合はうといふのである、そして伊藤君は『コチコチ真面目に働ませう』といふ意をこ

めて恩人秋津君に大きな目ざまし時計を贈った

記事では秋津が先に伊藤宅を訪問したが、不在であった点、秋津の訪問を知った伊藤が秋津のために数々の準備をした点などが事細かに記されている。「アド・バルーン」ではそうした部分は省略されており、かわりに田所勝弥と谷口直太郎という人物が登場してすぐに十吉と秋山の再会の場面となる。田所は記事中の済生会大阪府支部主事の田村克巳を、谷口は同様に記事で紹介されている大阪東成禁酒会副会長の熊谷直記をモデルとして造型されているのであろう。再会の時刻、「昭和十六年三月二十一日午後五時五十三分」、「彼岸の中日の日没時で太陽が大鳥居の真西に沈む瞬間」など、これらの表現についても「アド・バルーン」への影響の大きさを確認することができるだろう。

ここまで見てきたように、「アド・バルーン」は『大阪朝日新聞』が掲載した「人生双六」の「美談」から発想されたことがよくわかるだろう。もちろん、記事の内容をもとにして、織田作之助の創作、もしくは改変が全編にわたって施されているし、加えて再会の場面以降の父親・円団治との和解へと物語が移行していくため、「アド・バルーン」は一個のフィクションとして成立していることは確かだ。しかし、「美談」に関して言えば、新聞メディアによって報じられた「事実」を過剰な語りのうちに虚構化してみせるという織田作之助の小説の方法論が改めて問われなければならないだろう。ただし、この記事がいつ、どこで、どのように織田作之助の目にとまったかはわからない。「あとがき」に記されているように「昭和二十年三月、大阪が焼けた直後」のことなのだろうか。それとも、初出末尾に記された「二〇・六・一〇」に近い時期なのだろうか。また、「起ち上る大阪」(『新潮』1945年4月)のなかで火除地蔵に言及するに際して田村克巳の名が出てくるため、そこで「人生双六」について直接聞き知ったのだろうか。しかし、その詳細は今のところ不明である。そのような制作過程に関する疑問は残されているものの、ここで問題にすべきなのは、この「美談」をあえて物語に導入した意味である。続いて、「美談」の行方を見届けておこう。

3. 「美談」の行方

十吉と秋山の一度目の再会から五年後、二度目の再会についても、『大阪朝日新聞』でそのモデルを確認することができる。伊藤清と秋津勝雄の再々会は「アド・バルーン」と同様に、最初の再会から五年後に行われた。まず、その関連記事は1941(昭和16)年3月1日に掲載された「「人生双六」五年の“上り” さて相手は？ 迫る誓ひの日」という見出しの記事である。「アド・バルーン」では語順を変えてほぼ同じものが3月18日の朝刊の見出しとして採用されている。現実の記事では五年前の伊藤と秋津との再会の経緯とその関係者について触れ、その後、五年間の伊藤の様子と3月21日の再々会について報じている。(1941/3/1 2面)

伊藤君は毎月一円づつためた秋津君名義の通帳をもつてゐた、左手首には数珠があつた、昭和十二年秋たつた一人の老父へ孝養を尽くしたいと帰京、老父の眼の治療に所持金をすっかり使ひ果したが生れて初めての孝行に歓喜したのだ、鉄路をさまよつたことも幾たび、その都度彼の脳裡に閃くのは“五年後の約束”だつた、“働かう”バタ屋になり、紙芝居も始めてみた、間もなく東京第一陸軍病院に得意の紙芝居をもつて白衣の勇士を慰問する伊藤君の姿が見うけられた

再び大阪に帰つたとき伊藤君は立派な信仰の生活に入り造船所の倉庫番、病院の看護員などをつとめ、一昨年十月からもとの紙芝居屋に帰つて街の子供のよい遊び友達となつたものだ

伊藤の父への孝行の話は時系列の変更と創作とが加わって、「アド・バルーン」の最後、十吉とその父親・円団治との和解、そして最後の納骨の場面につながっていったと考えていだろう。それ以外の箇所、たとえば、伊藤の帰阪後の「造船所の倉庫番、病院の看護員」という職歴は十吉のそれと完全に一致する。そして、3月22日には伊藤と秋津の再々会を報じる「出世双六 天王寺の再会 再び「五年後」へ 飛入り十一人」と題された記事が掲載される。(1941/3/22 3面)

この日の対面を行ふため、人生双六の骰子を振つた一人、大阪東成区片江町一丁目伊藤清君(三八)は同区深江中三丁目小山鉄工所主小山新造氏夫妻、同区大今里町熊谷直記氏らにもなはれて五時すぎに約束の大鳥居下に国民服姿で颯爽と現れた、彼岸の中日でごつたがへす大鳥居脇は忽ち物凄い人の山

“あれが人生双六の一人だ、との声が揚ると天王寺消防署の窓も天王寺施療病院の窓も人の鈴なり、それからしばらくして人生双六の出発から愛の監視をつづけてゐる大阪府社会課田村克巳氏と二人をお手本にして芸道に精進、二つの踊りの名取りとなつた田村尚子さんが現れる、時刻はせまる

このとき国防服に身を包んだ青年が額の汗をふきながら駆けつけた、五時五十三分一秋津君だ、見物人たちは“上りだ、”上りだ、”と叫ぶなかに、対面は感激の一瞬で終つた、二人は五年目に握つたお互ひの手の温かさを味ふ間もなく田村氏らに伴はれて約三町離れた天王寺区逢阪下之町玉水園内の精神道場“春風荘、に入つた



(中略)

秋津君の話によるとこの五年間は波乱万丈の人生苦闘史で、この日も再会のため四時二十五分着列車で九州からかけつけたもので、同君は伊藤君と別れてから一度結婚したが親戚の反対で不縁となり、世をすねたあげく人生を見限つて自殺せんとしたが誓約を思ひ出して九州に渡り高島、新屋敷などの鉱山を転々昨年六月から佐賀県小城郡東多久村字別府の橋富合宿所に入つて山城礦業所で仕操夫監督となり黒ダイヤの戦士として国策に励んでゐる

かくて伊藤、秋津両君とも初めての家庭生活の夢を破られて人生にすねんとしたが、そのつど誓約のことを思ひ出して起ち直らう起ち直らうと一心に努力したもので、同夜は秋津君は伊藤君方で尽きぬ話に夜を明かし、二十二日は二人で伊勢神宮、橿原神宮に参拝する

この記事では伊藤と秋津の二度目の再会と秋津の五年間の経歴が紹介されている。「アド・バルーン」での秋山が結婚に失敗した話と九州へ渡った以降の職歴が一致し、この記事への依存度も高いことは一目瞭然だ。再会後に赴く「春風荘」もそのまま、「事実」の虚構化は「アド・バルーン」後半の十吉の語りを支える重要な要素なのだとはいえるだろう。

ただし、「国策に励んでゐる」という字句や伊勢、橿原両宮への参拝など、時代性を感じさせることばが省かれている点には注意しておきたい。また、新聞記事では伊藤の姿を「国民服姿で颯爽と現れた」と表現しているが、「アド・バルーン」の十吉は「自分のみすぼらしい新聞に書かれた出世双六などという言葉におよそ似つかぬ姿」と自らを語る。こうした点からも織田作之助は「美談」を使いながらも、微妙に新聞記事からの距離を保っていることは確かである。さらに、付け加えるならば、「田所さんの御嬢さん」に関する記事も考慮していいかもしれない。

「アド・バルーン」で十吉の後援者として登場する田所には娘がおり、「田所さんの御嬢さんは舞をならっているそうです。」という説明が一文だけ入る。だが、ほかの箇所には田所の娘は登場せず、この一文はいささか唐突である印象は拭えない。3月16日の新聞記事には「二人をお手本にして芸道に精進、二つの踊りの名取りとなつた田村尚子さん」とあり、この女性が田所の娘の設定がなされていることがわかる⁹。田村尚子は伊藤の後援者である大阪府社会課の田村克巳の娘である。付け加えると、「アド・バルーン」執筆に関しての言及がある川島雄三宛の書簡に「さる佳人（当年二十一才、志賀山流名取）」とある女性であろう¹⁰。一連の「人生双六」の記事にはこの田村尚子に関する記事がある。（1941/3/16 7面）

大阪城の出世双六 大詰へ飛入り少女 『お蔭で私は踊の名取に』

既報一大阪城の濠端で救はれたうらぶれの青年が救ひの主となつた人生双六の
骰子、五年後の再会を誓つた日はあと六日に迫つた、骰子を振つた一人伊藤清君

(三八)の居所はわかったが、相手の秋津勝雄君(三八)はまだどこに居るのかもわからない、二十一日午後五時五十三分の天王寺西門大鳥居下こそは世の人々が大きな期待をもつて待ち焦れる人生劇の舞台となつたが、この舞台に感激をもつて飛入り出演する一人の少女が登場してこゝに人生双六は一段のうるはしさを添へるにいたつた

大阪天王寺区北山町、大阪府社会課田村克巳氏の一人娘尚子さん(一七)がその少女、お父さんの田村氏は人生双六の出発点から伊藤、秋津両君の出世競争につねにやさしい監視の目を注いでゐる人だ、尚子さんは大谷高女三年生、八歳のときから健康のためにと豊中市南中通日本舞踊家蔦山流の家元坂東保尾師のもとに通ひ舞踊の道に精進、骨身を削る修行をつんでゐたが

十一歳のときお父さんの田村氏から『依頼心を起さず互が苦勞の限りをつくして一かどの人間になり国家へ御奉公をしよう』と西と東に別れひたむきに更生街道を走り続けてゐる人生双六の更生二人男の立派な生活態度をきかされ純な乙女心を感激に燃えたせ『あの人たちには負けられない』と芸道への精進を誓つた

この生きた教訓を胸に抱いての苦難の修行は実を結んで一昨年東都舞踊界に古い伝統を誇る志賀山三番叟の家元志賀山勢以さんから志賀山伊登門の名を許され、また蔦山流家元からは蔦山保門の名を許されて十五歳の若さでお師匠さんになり、お弟子もとれるやうになつた『これもみな人生双六を手本にして勉強したお蔭だ』

誇らぬ尚子さんはそれまでお父さんの田村氏が更生二人男のために貯金してゐた更生積立を『私に代らせて下さい』と引受け、お父さんにリレーして感奮謝恩の記念貯金をはじめたのだつた、尚子さんにも待たれる二十一日である、その日の対面にはぜひ天王寺に出掛けて二人にお礼を述べ、激励して貯めた更生資金を贈りたいと可憐な少女は指折り数へてゐるのだ

このため二十一日東京上野の松坂屋で開かれら第三回舞踊コンクールに出るはずだつたのも断つてしまつたといふ、十五日尚子さんは『私がともかくも一通り踊れるやうになつたのは人生双六のおかげです、どうかして消息のわからない秋津さんが健康で人生の再出発に成功してゐられることを祈つてゐます』

と美しい瞳を輝かせてゐる



伊藤と秋津の再会劇がもたらした感激が第三者であるはずの一人の女性にも影響を及ぼし、努力の結果、「二つの踊りの名取り」にまでなる。さらに、更生積立貯金を父に代わって行い、二人の再会劇のために舞踏コンクールをキャンセルしてしまう。このように「美談」が「美談」を連鎖的に発生させていく。「人生双六」と名付けられた伊藤と秋津の再会劇は単なる二人の再会を超えた意味を持たされていたのである。二人の再会劇にしても当初の意味を超え、「依頼心を起さず互が苦労の限りをつくして一かどの人間になり国家へ御奉公をしよう」と以前の記事には見られなかった国家への「御奉公」という要素が付け加えられている。こうした点を織田作之助が「アド・バルーン」に取り入れなかったのは意図的か否か不明だが、結果的に「美談」の「時局便乗」が「この程度のものであった」という青山の発言が妥当性を持ちえることになったといえるだろう。

4. 約束は果たされたのか

「アド・バルーン」後半の十吉の語りが現実の『大阪朝日新聞』の新聞記事を下敷きにしていることはこれまでの新聞記事との比較によって明らかである。もちろん、虚構化が意図された部分も多いが、もっとも大きな違いは秋山と十吉の再会の年である。先に引用したように、実際の新聞記事によれば、伊藤清と秋津の最初の出会いは1932（昭和7）年、一度目の再会はそれから四年後の1936年3月、二度目の再会はさらにその五年後、1941年である。一方、「アド・バルーン」での二人の最初の出会いは物語のなかで十吉が語る新聞記事に「四年前一昭和六年八月十日」とある。そこから四年後、1935年に一度目の再会、二度目の再会はその五年後、1940年だと決定することができる。つまり、「アド・バルーン」においては、再会の間隔はそのままにしつつも、実際の再会時期から一年早くずらして設定しているのである。こうした設定は単なる虚構化の一端であることは否めないが、それにしてもなぜ1940年なのだろうか。

「アド・バルーン」における時間感覚は十吉の語りのうちに曖昧にされる場合がある。たとえば、前半部分、大阪の町についての記述のなかにも時間的な錯誤は見出される。十吉は七歳のとき、父親に引き取られ、大阪市内に戻ってくる。十吉の誕生は最初に里子に出された際、「私が行ってから一年もたたぬ内に日露戦争がはじまって主人が出征し」とあるため、1903年のことだと推定できる。十吉が実家に戻ったのは七歳なので、1910年となる。その後、継母の浜子に連れられて見た大阪の夜の町の風景を十吉は詳しく語るが、その際に登場する楽天地は実際には1914（大正3）年開業で、時期が合わないことをすでに斎藤理生が指摘している¹¹。斎藤によれば、「現実とのずれは、必ずしも小説の欠陥とはいえない。一篇は十吉の一人称回想形式になっている。ならば作中の記述と現実のずれは、作者のミスではなく、語り手の記憶ちがいかも知れぬと疑ってみたいべきであろう。いや、それら大阪名所の挿入は、語り手による脚色と見ることさえ可能である」。それゆえ、「アド・バルーン」では語り手の行為の意味が問われなければなら

ない。もちろん、すべてを「語り手による脚色」とすることもできない。たとえば、父の遺骨を高野山に納めに来たところで十吉は語りを終える。その日は1941（昭和16）年8月10日と設定されているのに対して、その少し前、父の死を語る場面では父との再会后、「二年後の五月には七十六歳の大往生を遂げました」と語られている。十吉と円団治との再会は1940年秋山との再々会時であるため、その二年後ならば1942年のはずである。その他の年月日はほぼ計算の通りであることを考えると、これは織田作之助の錯誤であるとも思われる。

そうとはいうものの、物語内部の時間が現実の時間と必ずしも一致させられなければならないわけではない。むしろ、現実の時間を超えるように物語時間が伸縮させられる事態もおこりうるはずだ。ただ、物語の時間が無制限に伸縮されるわけでもない。「アド・バルーン」では時々「日露戦争」や「満州事変」など、歴史的な時間を参照させながら、十吉という一人の人間の生きている時間が基軸として導入されている。生まれた直後からの半生を語っていくという十吉の語りそのものが一定の時間軸として作用しながら、十吉の主観のうちに物語の時間が再構成されていく。そこに「語り手による脚色」という方法が成立するのだ。物語前半では「大阪惜愛」というモチーフゆえに現実の時間からの乖離が方法として選択されたのである。物語後半、「人生紙芝居」の逸話についても、まずはそうした現実の時間から物語のなかの時間を乖離させるように試みられているのだと考えられるだろう。

物語後半において確固たる時間枠として設定されるのが再会までの五年という時間である。この時間は新聞というメディアの導入によって「昭和六年」、「昭和十五年」という歴史的な時間と関係づけられ、十吉の生きる時間が現実の時間と同調させられていると考えていいだろう。これらの時間の設定から招来されるものは、三度目の再会を約束した日、「五年後の今日同じ時間」、1945（昭和20）年3月という時間である。ここにはおそらく大阪大空襲（第1回）の時間が重ね合わされている。これは織田作之助が「アド・バルーン」執筆の動機を記した単行本のあとがきに「昭和二十年三月、大阪が焼けた直後」とある、その空襲のことである。

『昭和大阪市史』によれば、大阪市への空襲の主なもの28回を数えた¹²。1945（昭和20）年1月初旬から3月初旬までの期間にも13回ほどの空襲が行われているものの、ほとんどが単機での爆撃で被害も軽少だった。しかし、3月13日の深夜から翌日にかけて90機のB29爆撃機が来襲、初めての大規模な空襲が行われた。この後、6、7月にはそれぞれ5回ずつ、8月にも2回ほど、大規模な空襲があったことを『昭和大阪市史』は伝えている。これらの空襲のなかで3月13日から14日にかけて行われた最初の大規模空襲を大阪大空襲（第1回）と呼ぶ。この大空襲では焼夷弾の投下などによって死者4千人あまり、傷者1万8千人あまり、消失倒壊戸数13万余という甚大な被害がもたらされた。

織田作之助にとっても大阪大空襲は忘れえぬ出来事であったことは想像に難くない。「立ち上る大阪」では「過ぐる三月の、日をいえば十三日の夜半、醜悪にして猪口才な

敵機が大阪の町々に火の雨を降らせた」と記されている。そうした状況下でも再起する大阪の市井の人々の力強さをルポルタージュ風に語るのが「起ち上る大阪」であった。「起ち上る大阪」は空襲の一ヶ月ほど後に発表されているが、それと遠からぬ時期に執筆されたであろう「アド・バルーン」において、十吉と秋山の三度目の再会が現実の伊藤清と秋津の約束の年月日を変更し、この空襲の一週間後、3月21日に設定されていることを単なる偶然とすることはできないだろう。

語り手である十吉は物語における未来に起こるはずの大阪大空襲を知る由もないが、私たち読者は十吉と秋山の三度目の再会の約束が果たされたかについて疑問を持たざるをえない。なぜなら、読者は再会場所である四天王寺や十吉が父親との再会後に移り住んだ千日前が大阪大空襲で甚大な被害を受けたことを歴史的に知っている。十吉と秋山の再会の場は失われ、それ以前に十吉の生死すらも危ぶまれることも読者は知ってしまったのだ。はたして、十吉は生き残れたのだろうか。二人の約束は果たされたのだろうか。十吉はそうした問いを読者に残して語りを終える。

先にも記したように、物語内部の時間が現実の時間と必ずしも一致させられなければならないわけではない。物語のなかでは大阪大空襲が起こらないということも考えられる。「アド・バルーン」が語り終えられた時点での物語の現在である1941年8月10日は太平洋戦争がまだ開始されておらず、物語内の未来では戦争そのものが起こっていない、そんなもしもの世界を想像することも可能だ。ただ、そうだとすると、前半部の「大阪惜愛」のテーマは意味の大半を失うことにもならないか。わざわざ単行本のあとがきで言及しているように、空襲によって大阪の町が焼失したからこそ「アド・バルーン」で詳細に語られる大阪の町への織田作之助の「惜愛」の深さが意義づけられている面も大きい。もしも、「アド・バルーン」が空襲のない世界を描き出しているのだとしたら、「惜愛」というテーマの深さは半減するのではないか。そう考えると、やはり大阪大空襲が行われる未来を物語にも導入する方がいいのではないか。

そこで、改めて先ほどの問いに戻ろう。大阪大空襲の一週間後、はたして十吉と秋山は再び出会うことができたのだろうか。二人の再会は叶わなかったのか。戦火を無事に潜り抜け、再会を祝い合ったのか。この答えのない問いは戦争という状況に翻弄される一般庶民の姿を浮かび上がらせる。アド・バルーンとはそうした十吉の姿の比喻でもある。「アド・バルーン」とはつねに語りのうちにそうした問いを抱え込みつつ、読者に開かれている物語でもあるのだ。

¹ 樋口彩乃「織田作之助「アド・バルーン」論 ―十吉の語りと「惜愛」―」（『論究日本文学』（立命館大学日本文学会）94 2011/5

² 斎藤理生「大阪・脱線・嘘 ―織田作之助『アド・バルーン』の語り―」（『語文』（大阪大学国語国文学会）97 2011/12

³ 十吉の年齢については、①25歳の11月10日に扇子売りの夜店で文子と再会した十吉が大阪を出て、三年後に白浜で文子と再会する点、②東京から大阪に戻ってきて中之島公園で秋山と出会ったとき、「年は私と同じ二十七、八でしょうか」と語っている

点、などから推測。

⁴ 青山光二「解説」(『夫婦善哉』1950年1月25日 新潮文庫)

⁵ 「あとがき」『世相』(1946(昭和21)年12月20日 八雲書店)ただし、初出末尾に「二〇・六・一〇」と脱稿日が記されており、この「あとがき」とは一致しない。

⁶ 斎藤前掲論文(注2)

⁷ 佐藤秀明「『解説』可能性の「織田作」」(『六白金星・可能性の文学 他十一篇』2009年8月18日、岩波文庫)

⁸ 「アド・バルーン」では十吉が東京から大阪に戻った日に秋山と出会っていることから1936年3月20日付の記事をもとにしていると考えられる。

⁹ 田村尚子については「起ち上る大阪」において「田村さんの令嬢で、二十一歳の若さでありながら、二代目志賀山勢鶴を名乗る志賀山流舞の名取である尚子さん」、「大阪で志賀山流の名取は尚子さん唯一人、尚子さんは放送局の文芸部へ勤められる余暇を、舞の手の記録に捧げておられる。志賀山流の伝統保存のためであることは言うまでもない。」と語られており、「アド・バルーン」で省略したエピソードを補完しているともいえる。

¹⁰ 1945年6月30日付川島雄三宛書簡(『定本織田作之助全集』第8巻(1976年4月文泉堂書店))

¹¹ 斎藤前掲論文(注2)

¹² 『昭和大阪市史 第6巻 社会篇』(1953年 大阪市役所)